

『韓国語教育研究』(第3号) 別刷

ISSN 2186-2044

【寄稿論文】

淵澤能恵 概説

姜 奉植

日本韓国語教育学会

2013年9月

# 淵澤能恵概説

姜 奉植

## 1. 功績

1905年5月、渡米苦学経験の持ち主で敬虔なクリスチャンでもあり、長年日本の女学校で女子教育に携わってきた、淵澤能恵は岡部長職夫妻の奨めに応じ、東京から韓国に向かって旅立つ。既に淵澤の齢55歳の時である。

この時の日韓関係は、韓国の支配権をめぐる日露戦争の行方が日本の勝利に傾き、日本の韓国保護国化への動きが高まってきた時期でもある。

淵澤は、渡韓後、近代化に立ち遅れている韓国女子教育を目の当たりにし、深く心を動かされ、韓国女子教育の必要性を痛感することになる。最初は、京城学堂堂長である渡瀬常吉牧師に女子教育について相談をし、学校設立の計画を練っていたが、渡瀬牧師の後輩で、淵澤にも世話になっていた松本雅太郎を日本から呼び、松本も加わって学校設立を手伝うことになった<sup>1</sup>。

学校設立のためには、先ず、日韓の婦人同士が集まり、交流と互いの理解を深めることが優先だと考え、韓国の貴婦人たちに女子教育の必要性を力説することから始めた。その甲斐あり、厳皇貴妃を担ぎ出して総裁にし、義親王妃を副総裁、李貞淑貞敬夫人<sup>2</sup>を会長、皇族の李鈺卿を副会長とする、この上ない陣容を構えた「日韓婦人会」を組織し、淵澤は総務に就いた。この韓国皇室への働きかけや橋渡しをしてくれたのは菊池謙讓<sup>3</sup>であるといわれる。

日韓婦人会組織後、日ごろ女子教育に関心を抱いていた厳皇貴妃<sup>4</sup>からも韓国貴族の娘たちを教育してほしいということで、この学校設立の話は、その後、厳皇貴妃からの支援を受けて計画がとんとんと進むことになり、いよいよ1906年5月22日には「明信女学校」という校名で開学する。この明新女学校は、先に米国人宣教

<sup>1</sup> 松本雅太郎著「雅堂回想記」のワープロ起こし p21-22、2000年4月2日

<sup>2</sup> 正2品以上の官僚の夫人に与えられる爵号。

<sup>3</sup> 菊池謙讓は、国民新聞社からの派遣記者として朝鮮に入り、日清戦争取材に従軍した人で、戦争後も京城に留まり、漢城新報の主筆をしながら韓国の朝野に相当の勢力を持っていた。

<sup>4</sup> 大韓帝国高宗皇帝の継室。

師が建てた梨花学堂<sup>5</sup>に継ぐ、韓国女子教育のための近代的な学校の始まりといえよう。

淵澤は、明新女学校設立に多大な貢献をした最大の功労者であることはいうまでもない。設立後は、同校の学監に就任し、没するまでの約 30 年間同校に在職しながら、女子教育はもとより学校の運営、また「財団法人淑明学園」<sup>6</sup>の理事（理事は 1 人しかいなかったので実質的には理事長の役目である。）として学校の経営にまで力を尽くしてきた、事実上の学校と法人の総責任者であった。

日韓併合後、韓国皇室の財産は国有化とされ、それまで支援していた厳皇貴妃からの支援も難しくなり、学校経営の自活を図らねばならなくなった。淵澤は法人の専任幹事となった松本と相談し、厳皇貴妃の子である英親王宮からの下賜耕地 1000 町歩の資産運用を松本に頼んだ。ところが、松本が現地に足を運んでみたところ、耕地とはいえ、放置されていたので荒蕪地と化していたのである。荒蕪地を肥沃な農地に変える、大変な作業と努力を松本は長い年月をかけて成し遂げ、やがって運用できる農地に仕上げたのである。この農地の運用でその後の学校経営は健全化することができたのである<sup>7</sup>。

松本は、開学前から淵澤と共に開学準備を手伝っており、開学後も終戦で日本に引き上げるまでの約 40 年間ずっと淑明学園の幹事として、女性の淵澤にできない面倒な仕事を代わって手伝ってきた人である。この二人を抜きにして淑明学園史は語れないほど学園に尽くした功績は大変大きい。この二人の苦勞と尽力によって淑明学園が財政的に自立するようになり、学校を大きく発展させることができたのであり、淵澤と共に松本も建学最大の功労者といえる。

建学最大の功労者にはもう一人がいる。校長の李貞淑である。貴族出の李貞淑は、近代的な教学と学校運営には疎かったようであるが、生徒募集には一役を担っていたようである。学校設立当時の生徒は、わずか 5 名で、当初、淵澤はがっかりしたようであるが、その後は、長年にわたる淵澤と李貞淑の努力が実り、生徒数も増加

---

<sup>5</sup> 米国人メソヂスト派宣教師の Mary Scranton 夫人により 1886 年に設立された韓国最初の近代的な女子学校。

<sup>6</sup> 「明信女学校」は、1908 年に「明新高等女学校」へと、さらに翌年には「淑明高等女学校」へと改称され、1912 年には経営の自活を目指して「財団法人淑明学園」となる。

<sup>7</sup> 前掲「雅堂回想記」p33-38

し続け、30年後の淵澤没年である1936年3月には生徒数528名を誇る立派な名門女子学校となっていた。

淵澤は、開学時からずっと学校内に住み込みながら生涯身を挺してキリスト教精神の下に献身的に教育を行い、韓国で一二を争う名門女子学校に育て上げた、偉大なる教育者である。

当時、日本の植民地下にあった学校だけに植民地統治に疑問を持つ生徒たちがデモに参加したりして学校に迷惑をかけるようなこともあったが、淵澤は、決して生徒を叱ることなく、いつも警察や憲兵隊から生徒を守り続ける一方、敬虔なクリスチャンとしてひたすら神様に生徒や学校の平穏無事を祈りつつ、試練は自分に与えたまえと刀自自身に鞭をかけていた人であった。植民地時代の日本人でありながらも生徒からの信頼はとても厚く、大変尊敬されていた、立派な教育者であった。

このような韓国女子教育への功績が讃えられ、戦前、淵澤は「韓国女子教育の母」または「内鮮融和の母」と謳われ、生前、勲六等宝冠章を叙勲されるなど、各界から数々の表彰を受けた。

淵澤の没3年後にあたる1939年には、刀自念願の「淑明女子専門学校」が開学するが、これも生前、淵澤能恵が基本構想を練り、齋藤實朝鮮総督に相談をしながら、念入りに設立準備を進めてきた結果、設立できた専門学校である。戦後の1948年には4年制の「淑明女子大学校<sup>8</sup>」に昇格し、「淑明女子大学校」は、現在名実共に韓国屈指の名門女子大学として君臨しており、数多くのエリート女性を韓国社会へと送り出している。

## 2. 生い立ち

淵澤能恵は、1850年、陸奥国稗貫郡八重畑村字関口<sup>9</sup>で父・淵澤武市と母・ツヤの次女として生まれた。兄弟は2男2女であり、父は下級武士であったが、生活が貧しく、能恵は生後9ヶ月で隣接郡である和賀郡土澤<sup>10</sup>の人首新次郎家に養女に出された。6歳の時には、不幸にも養父が亡くなり、その後は、養母であるカルの元で育てられた。

---

<sup>8</sup> 韓国では四年制の総合大学を「大学校」という。

<sup>9</sup> 現在の岩手県花巻市石鳥谷町関口

<sup>10</sup> 現在の岩手県花巻市東和町土沢

11歳の時は、養母が本籍の「高木」姓に復籍し、稗貫郡矢澤村<sup>11</sup>にある実家「田向屋」に戻る時、能恵を連れていく。

翌年、養母は隣の紫波郡<sup>12</sup>の千葉家に再婚することになるが、この時も能恵を連れて行くほど養母には大事に育てられた。

能恵は小さい頃から勉強好きの利発な子で、土澤城内の小野寺塾に通ったり、近所の藤根勘五郎より漢学を習い通ったりしたという。13歳の時には、同城内にある酒屋・河内屋に女中と子守の仕事に行き、そこで10年間奉公した23歳の時、河内屋の長男である清水茂吉と結婚するが、間もなく離婚する。

### 3. 渡米と洗礼

離婚した1873年、淵澤能恵は、釜石にいる兄・恒人を頼って土澤から釜石に移る。釜石では、兄の仕事を手伝っていたという<sup>13</sup>が、そこで『亜米利加事情<sup>14</sup>』を読み、米国に関心を持つようになり、渡米の希望を抱いたのではないかと見られる。

釜石で彼女の人生における大きな転機が訪れる。1879年9月、釜石で働いていた外国人御雇技師であるG Purcell<sup>15</sup>一家が米国に帰る時、淵澤はPurcell家の子守りとして一緒に渡米することになる。Purcell宅のあるロサンゼルスで淵澤は子守りの傍ら医師の勉強を志していたようであるが、Purcell家には、腕白盛りの子供から赤子まで4人の子供がおり、4人とも淵澤が世話をしていた<sup>16</sup>。案の定、Purcell宅では勉強どころでなくなり、子守りの世話ばかりで一日が明け暮れてしまう始末になった。

このままでは志していた勉強ができないと悩んだ淵澤は、サンフランシスコの柳谷領事に悩みを打ち明け、相談を持ちかけるのである。幸いに柳谷領事の好意により翌年、Purcell家を出てサンフランシスコに移住することになる。サンフランシスコ

---

<sup>11</sup> 現在の岩手県花巻市矢沢

<sup>12</sup> 現在の岩手県紫波町と矢巾町

<sup>13</sup> 小塩完次（「満州に使用して」婦人新報第428号p43）によれば、淵澤能恵は、「兄は酒屋で若いころその手伝いをしていた」と述懐していたという。

<sup>14</sup> 濱田家の資料によると、福沢諭吉著『西洋事情』のことかもと述べている。

<sup>15</sup> GPurcellは、明治政府工部省鉄道寮の御雇英国人技師で、1875年から釜石で鉄道小川支線の建設にあたった人。

<sup>16</sup> 久布白落實「淵澤能恵女史憶ふ」婦人新報第456号p25

コではミス・プリンスという人の家でまたメイドの仕事をするようになるのであるが、プリンス家は Purcell 家とは違い、働きながらも英語と家政を習うことができたという。

ここで淵澤は、熱心なクリスチャンであったミス・プリンスの影響を諸に受けたのか、キリスト教に入信をする。淵澤は、1882年1月5日、サンフランシスコで Dr.ストーンよりプロテスタントの洗礼を受ける<sup>17</sup>が、洗礼を受けるや否や米国での生活に終止符を打ち、日本への帰国を決心する。この決心には、育ての親である養母からの強い帰国要請があり、これに応えての帰国であったといわれる。

淵澤定克によれば、淵澤能恵は会衆派の牧師から洗礼を受けたとなっている<sup>18</sup>が、この会衆派の牧師とは Dr.ストーンのことであろう。

同月、淵澤は日本への帰国船に乗り、帰朝する。

#### 4. 学歴と教歴他

淵澤能恵は、帰国するや否や同年4月に同志社女学校に入学し、新島襄の薫陶を受けることになる。当時、淵澤の年齢は32歳であり、入学年齢をとくに超えていたので、7歳を偽って入学したという。

ところが、淵澤は3年後の1885年6月、残り修業年限9ヶ月を待たずにして同志社を中退してしまう<sup>19</sup>。

淵澤が同志社にいた時は、熊本バンドの人たちは既に学業を終え、宣教活動等に旅立った後であったので、同志社では淵澤と熊本バンドとの直接的な接点はなかったように思われる。

淵澤は、1885年9月より東京麻布烏居坂東洋英和女学校で教鞭を執り始め、翌年11月まで勤める。このころ、米国で世話になったミス・プリンスが文部省の招聘により官立一橋高等女学校の米国人教師として来日したが、この来日は当時の文部大臣森有礼が押し進めていた英語による教育事業の一環と考えられる。ミス・プリン

---

<sup>17</sup> 霊南坂教会員履歴

<sup>18</sup> 淵澤定克著「淵澤能恵とその支援者たち」日本韓国語教育学会創立記念国際学術大会誌 p87

<sup>19</sup> 同志社中退については、学費が続かなかったという説と、同志社の宣教師と意見衝突で憎まれたためという2つの説がある。淵澤能恵は半官費で在学していたという説もあるので、前者は説得力を欠く。後者だといわゆる「同志社女学校明治18年事件」に巻き込まれた可能性が出てくる。

スは淵澤に要請し、淵澤は1887年1月から氏の通訳兼同校塾取締に就任するが、いつごろ退職したかについては、鳩山春子の回想<sup>20</sup>からだと、1889年2月11日に森有礼文部大臣が暗殺されると英語による教育も見直され、ミス・プリンスは帰国することになり、淵澤も離職を余儀なくされたのではと推論できる。

翌年の1890年5月に東京麹町上6番町に女子教育のために家塾を開設するが、下関の洗心女学校に招かれることになり、家塾はわずか4ヵ月で閉じる。同年9月に下関に移り、下関洗心女学校で教鞭を執るが、学校閉鎖により2年後の1892年3月に離職する。

同年4月からは福岡英和女学校に移り、同年7月まで勤める。この期間中には定かな内容は知られていないが、「淵澤能恵退職事件」というトラブルがあったという<sup>21</sup>。淵澤が同志社女学校にいた時の「明治18年事件」が妙に脳裏を掠めるのであるが、淵澤は若いころは、結構発言をする女性だったかも知れない。

翌年の1893年1月に熊本女学校に移るが、次の年9月には病を得て辞職する。その後は、熊本バンド出身の海老名弾正の勧めで養母と共に兵庫県下<sup>22</sup>の武田貞吉宅に寄留しながら同家の子女の教育にあたった後、上京する。

淵澤は、熊本女学校にいた時、数人の熊本バンド出身者と同僚として働くことになり、また、熊本女学校を通してその関係者や弟子たちとも知り合いになる因縁ができる。この地で仲間意識を共有した、多くのクリスチャンたちの人脈は、その後の彼女の人生に大きな影響を与えることになり、韓国で女子教育を興す時にも彼らと一緒に協力してくれる。

熊本バンド出身者としては、熊本英学校と熊本女学校の設立者である海老名弾正と熊本女学校校長である蔵原惟郭がいる。他に、熊本バンドではないが、熊本女学校の舎監で、藤原に継いで校長となる竹崎順子もいた。竹崎順子は淵澤より25歳年上の人であるが、有名な妹が3人いる。すぐ下の妹2人の子が熊本バンドの徳富蘇峰（徳富一敬と妹・久子の子）と横井時雄（横井小楠と妹・つせ子の子）であり、末の妹が、日本キリスト教婦人矯風会初代会頭になる矢嶋楫子である。なお、海老

---

<sup>20</sup> 江藤伸子著「淑明女学校と熊本英学校 —淵澤能恵と熊本英学校人脈」、『近代の黎明と展開—熊本を中心に』熊本近代史研究会発行 p97-98、2000年8月1日

<sup>21</sup> 福岡女学校五十年史編纂委員編『福岡女学校五十年史』福岡女学校1936年3月、p151

<sup>22</sup> 神戸ともいう。

名は横井時雄の妹と結婚しており、クリスチャン同士の強い結束も窺える。

熊本女学校在職時は、熊本英学校との交流もあり、淵澤は英学校生の江藤哲蔵や松本雅太郎らにも慕われており、またそこには渡瀬常吉が教師をしていた。

熊本バンドの出身地で日本キリスト教会衆派の聖地ともいえるところに淵澤はいて、熊本バンドの仲間たちと共に行動し、リベラル神学をさらに磨きかけたのであろう。

淵澤は、上京した翌年の1895年4月に東京麹町3番町に女塾を開設し、後に鳥居坂女学校にも勤める。

1896年3月に熊本英学校の後身である九州私学校が廃校となるが、江藤哲蔵ら廃校学生が上京し、淵澤を頼る。淵澤は彼らの相談相手となり、数年間母親のように彼らの入学や住居のことを世話する。

淵澤は、1900年に東京駿河台鈴木町お茶の水橋畔に文具店「梅屋」を開業するが、これも熊本英学校に学んだ学生たちのたむろ場になってしまう。

このごろ、淵澤は、鹿鳴館にも出入りをし、桂太郎侯爵夫人や山縣有朋侯爵夫人とも交際があり、また原六郎の家庭教師をも務めていたともいう<sup>23</sup>。

その後は、1905年に渡韓し、1906年5月より明新女学校学監に就任し、1936年2月に亡くなるまで終身学監を勤めた。

なお、1912年1月より財団法人淑明学園理事に就任し、これもまた終身理事を勤めた。

## 5. キリスト教歴

淵澤能恵は、先述したように1882年1月5日、米国サンフランシスコで会衆派牧師のDr.ストーンよりプロテスタントの洗礼を受けて日本に帰ってくる。帰国間もなく同志社女学校に入学するが、この時期は、前掲の霊南坂教会員履歴によれば、京都市第一基督教会に通っていたことになっている。

さらに、前掲履歴には、京都市第一基督教会から会衆派（組合教会）霊南坂教会

---

<sup>23</sup> 浜田家からの資料。原六郎の家庭教師と書いてあるが、原は淵澤能恵より8歳年上で、淵澤能恵よりも先駆けて米・英の大学に通算7年間の留学経験があり、ここでいう家庭教師とは通常の学業のこととは考えにくい。原は、晩年、キリスト教の洗礼を受けるが、もしかしたらキリスト教についての家庭教師であったかも知れない。



に転入したとなっているが、その時期については空欄となっている。淵澤は、1885年6月に同志社女学校を中退し、同年9月から東京麻布鳥居坂の東洋英和女学校で教鞭を執り始め、5年後の1890年9月に下関洗心女学校に赴任するまでの5年間は仕事で東京にいたので、この期間中に霊南坂教会に転入したことに違いはない。ただ、この時期は、赤坂霊南坂教会から霊南坂教会へと名称変更(1891年教会名改称)する前なので、正しくは赤坂霊南坂教会となる。

赤坂霊南坂教会は、1885年に熊本バンド出身の小崎弘道が組織した教会である。小崎弘道は翌年には番町教会も設立する。江藤伸子<sup>24</sup>によれば、淵澤は番町教会にも出入りをしており、小崎の家族とも親密な付き合いをしていたという。この付き合いは、その後、淵澤が亡くなるまで続く。

当時、小崎の教会には政府高官やその夫人たちが多く出入りしており、赤坂霊南坂教会には岡部長職子爵も信者として通っていた。この岡部は、冒頭で述べた淵澤に渡韓を奨めた人である。

淵澤は、1890年9月に下関洗心女学校に赴任した後、さらに九州の女学校2ヶ所に移り、その後の1894年に上京するが、この地方にいた4年間も教会籍は霊南坂教会においたままであった。上京後は、ずっと東京に在住し、霊南坂教会に通っていた。

淵澤は1905年5月、渡韓するが、霊南坂教会からの転出日は1906年1月8日で、京城教会<sup>25</sup>への転出となっている。渡韓日より転出日が約8ヶ月遅れていることから、渡韓時は帰国する意志があつての渡韓であつた可能性も窺える。ところが、韓国に滞在しながら近代化に遅れていた韓国女子教育の現状と韓国女性の置かれた、封建的な生活を目の当たりにし、キリスト教会衆派の信者として女子教育への使命のような、熱いものが湧き上がってきたのではなかろうか。

渡瀬常吉や松本雅太郎、菊池謙讓などの相談者や協力者が現れる中、女学校設立計画も進み、1906年1月には「日韓婦人会」という心強い設立後援団体が船出をすることになり、いよいよ学校設立計画も本格化してきたので、今後は命続くまで韓国で女子教育に専念する一大決心をしたのではなかろうか。それ故、教会籍も、こ

---

<sup>24</sup> 前掲江藤伸子著 p98

<sup>25</sup> 石原保太郎牧師が現在のソウル特別市中区貞洞に設立した、日本基督教団京城教会のことで、京城組合教会とも呼ばれた

の際、いっそ骨を埋めることになるかも知れない韓国という地の京城教会に転出したのではないかと筆者は推察する。

京城教会は、京城組合教会ともいわれる、日本組合基督教会の流れを汲んだ教会である。この日本組合基督教会は、日本の韓国支配に手を貸したことでも知られる。前掲の江藤伸子によれば、朝鮮総督府が同化政策を行うのに日本のキリスト教を利用しようと考えており、この誘いに乗ったのが日本組合基督教会であると述べている。これが事実なら、結果的には淵澤の女子教育事業も不本意ながら総督府に間接的に利用されていたという見方も立てられるかも知れない。

その後の1921年5月、矢嶋楫子と久布白落實が日本キリスト教婦人矯風会朝鮮支部設立のために来鮮し、淵澤能恵と相談する。これを受け、同年、淵澤は日本キリスト教婦人矯風会京城支部長及び在朝鮮組合教会婦人会長に就任し、1936年に亡くなるまで勤める。

淵澤の教歴は京城教会を最後に1936年2月に亡くなる。墓地は、京城府の日本人墓地といわれた弘濟墓地に埋葬された。

## 6. 叙勲・受賞他

1915年9月、叙勲「勲六等宝冠章」を賜り、従七位に叙される。

1925年3月29日、京城府教育会長表彰を受ける。

1925年10月10日、東京連合婦人会から功績状を受領する。

1927年6月5日、淵澤能恵、東亜日報社より教育功労者に選定される。

1930年3月、愛国婦人会総裁宮から一等有功賞を受賞する。

1933年11月、帝国教育会から功労賞を受賞する。

1935年3月、愛国婦人会から一等功労賞を受賞する。

1935年10月、朝鮮総督府始政25周年記念功労賞を受賞する。

## 7. 主要な刊行物

豊川善曄編集『淑明第二十号』校友会、1936年7月15日

山崎英一著『女性』むつみ会、1936年7月23日

松本雅太郎編集『校祖の余影』財団法人淑明学園・淑明女子専門学校、1940年9月17日

松本雅太郎著「雅堂回想記」1952年から執筆、ワープロ起こし(2000.4.2) (刊行物ではないが、最も貴重な資料なので挙げておく。)

高橋伊勢次郎遺稿「韓国女子教育の恩人 淵澤能恵刀自について」、『猿ヶ石叢書第二十九輯』土沢郷土研究会、1960年7月18日

石井智恵美著「淵澤能恵と「内鮮融和」 —日本の朝鮮統治下における女性クリスチャンの一断面—」、『基督教論集 第35号』青山基督教学会、1992年

藤原正造「淵澤能恵の生涯」、『いしどりや歴史と民俗 第13号』石鳥谷歴史民俗研究会、1999年8月31日

江藤伸子著「淑明女学校と熊本英学校 —淵澤能恵と熊本英学校人脈」、『近代の黎明と展開—熊本を中心に』熊本近代史研究会発行 2000年8月1日

太田孝子「植民地朝鮮における淑明高等女学校 —抗日学生運動を中心に—」、『岐阜大学留学生センター紀要』、2002年

石鳥谷花の会編集委員会著『淵澤能恵 —韓国女子教育の礎を築いた人—』石鳥谷花の会、2002年7月20日

会報「淵澤能恵通信」淵澤能恵を顕彰する会、創刊号(2005年1月10日)以後随時刊行

村上淑子著『淵澤能恵の生涯 —海を越えた明治の女性—』原書房、2005年12月2日村上淑子著・姜奉植訳『후치자와 노예의 생애 (淵澤能恵の生涯)』현학사 (ヒョンハク社)、2009年6月5日

宮澤正典著「同志社人物史102 淵澤能恵 —韓国女子教育に献身した女性—」、『同志社時報 第130号』学校法人同志社、2010年10月1日

日本韓国語教育学会創立記念国際学術大会編集委員会編「淵澤能恵生誕160周年記念フォーラム 近代韓国女子教育の礎を築いた淵澤能恵」、『日本韓国語教育学会創立記念国際学術大会誌』日本韓国語教育学会、2010年11月10日

## 8. 報道

### 「婦女新聞」

- 「韓国の貴族女学校の設立」1906年5月28日  
「朝鮮婦人の慈母たる淵澤女史」7面、1917年8月31日  
「内鮮融和のために」9面、1926年6月20日  
「淵澤女史歓迎会」3面、1928年7月1日  
「淵澤女史の功績を称えて」7～8面、1928年7月1日  
「朝鮮女子教育の開拓者 淵澤能恵刀自の生涯」6面、1936年2月16日  
「神と人と僕 教へ子として淵澤先生を憶ふ」7面、1936年2月16日  
「故淵澤女史逸話（一）」7面、1936年2月23日  
「故淵澤女史逸話（二）」8面、1936年3月1日  
「故淵澤女史逸話（三）」9面、1936年3月8日  
「故淵澤女史逸話（四）」8面、1936年3月15日

### 「婦人新報」

- 「朝鮮における女子教育 淵澤能恵子」第240号（1917年7月号）p8-9  
「満鮮の一月旅 守屋東」第297号（1922年12月号）p30  
「満鮮を巡りて 林歌子」第310号（1924年1月号）p42  
「満鮮の旅から帰って ガントレット恒子」第428号（1933年11月号）p41、p43  
「淵澤能恵女史を憶ふ 久布白落實」第456号（1936年3月号）p25  
「故淵澤先生の思い出 黒田眞子」第468号（1937年3月号）p34-35  
「満鮮北支への初旅を終へて 金森すみ子」第477号（1937年12月号）p26-27  
「回想のなかの会とひと 淵澤能恵とわたし 川又タキ」第1075号（1990年4月号）p21-22

### 「京城日報」

- 「朝鮮を育んだ人々 5」1935年9月10日

「朝鮮日報」

「淑明女高普校謝恩館落成式 熱烈な愛校心で六千余円の巨額が集まる」

1929年7月7日

「十五万円寄付募集 校舎は明春着工 今日淑明女専創立委員会」2面

1937年3月7日

「社説 淑明女専計画」1面

1937年3月8日

「淑明女専創立へ 有志の熱誠集中 崔承喜女史は舞踊会を開催」2面

1937年3月9日

「新設する淑明女専明春開校は不能 事変関係で寄付金募集許可が遅延」2面

1937年12月17日

「淑明女専設立計画明春に開校延期 寄付金募集認可願再提出」2面

1938年4月14日

「李王殿下土地御下賜 鍾岩町にある山林二十八町歩 淑明女子専門の光栄」2面

1938年5月14日

「淑明女専寄付金募集願 数日前当局から正式許可指令」2面

1938年5月18日

「今度は孝昌園一部六千余坪御下賜 」2面

1938年6月11日

「新生淑明女専教授陣決定 朝鮮人は教授等含七名」2面

1939年3月20日

「祝入学 淑明女専」2面

1939年4月1日

「淑明女専の呱呱声 墨痕新しい看板がけ 今日最初の入学式盛大」2面

1939年4月21日

## 「東亜日報」

「本社落成記念事業の一 功労者紹介 教育功労者 才媛養成 21 年間 市内淑明女高淵澤女史」5 面 1927 年 6 月 5 日

「キリスト教婦人強風会 旧歳末に配米」2 面 1935 年 2 月 1 日

「李王殿下 淑明女専基金下賜 時価廿万円 of 山林下賜を盼附」2 面 1938 年 5 月 13 日

「李王殿下 両度御下賜 明春四月開校 家政・技芸・専修科二百名募集 校舎は青葉町に新築 待望の淑明女専」2 面 1938 年 6 月 12 日

「淑明女専今日認可 文科・家政科生明春募集 旭町臨時校舎で開校」2 面 1938 年 12 月 22 日

「淑明女専生徒募集」1939 年 1 月 11 日

「開校淑明女専 廿日入学式挙行」1939 年 4 月 19 日

「淑明女専開校式」1939 年 4 月 21 日

## 戦後の報道

「東北女人三代 淵澤能恵 異国人に愛注ぐ ソウルで女学校を創立」河北新報 11 面 1968 年 4 月 4 日

テレビ放送「能恵は 55 歳で海峡を渡った」(30 分) テレビ岩手 2003 年 5 月 3 日

「明日に向かって 教育開いた淵澤能恵 韓国での功績後世に 石鳥谷花の会会長村上淑子さん(74)」岩手日報 2005 年 1 月 30 日

「韓国女子教育の母 淵澤能恵の伝記翻訳 県立大の姜教授母国で出版 功績に光 日韓友好の懸け橋に」岩手日報夕刊 7 面 2009 年 7 月 4 日

「『淵澤能恵の生涯』韓国語翻訳本の紹介記事」、『지방의 국제화 (地方の国際化) vol.154』韓国地方自治団体国際化財団 2009 年 9 月 30 日

「淵澤能恵没後 75 年で碑建立」岩手日報 16 面 2010 年 5 月 24 日

## 9. 淑明学園の沿革

- 1906年5月22日、「私立明新女学校」を創立（4年制）
- 1908年12月28日、高等女学校令により「私立明新高等女学校」に改称  
（本科3年制、予科2年制）
- 1909年5月、「私立淑明高等女学校」に改称
- 1911年11月1日、第1次朝鮮教育令第229号により「私立淑明女子普通学校（予科4年制）」と「私立淑明女子高等普通学校（3年以内）」に改編。
- 1912年1月13日、「財団法人淑明学園」認可
- 1927年3月15日、「私立淑明女子普通学校」廃止
- 1936年1月21日、「淑明女子専門学校創立準備委員会」発足
- 1938年、「淑明高等女学校」に改称
- 1938年9月、「淑明女子専門学校設立認可申請書」提出
- 1938年12月21日、「淑明女子専門学校」設立認可
- 1939年4月20日、「淑明女子専門学校」を創立
- 1946年、「淑明高等女学校」から「淑明女子中学校」に改編（6年制）
- 1948年5月15日、「淑明女子大学」昇格認可申請
- 1948年5月22日、「淑明女子大学」昇格認可
- 1948年、「淑明女子専門学校」が「淑明女子大学校」に昇格
- 1951年8月、「淑明女子中学校」が「淑明女子中学校（3年制）」と「淑明女子高等学校（3年制）」に分離改編
- 1955年1月25日、総合大学「淑明女子大学校」昇格認可申請
- 1955年3月9日、「淑明女子大学校」昇格認可
- 1964年、「財団法人淑明学園」から「学校法人淑明学園」となる。
- 2013年、3月、「学校法人淑明学園」から「学校法人明新女学園」が分離独立し、「学校法人淑明学園」は淑明女子大学校のみを運営することとなり、「学校法人明新女学園」は淑明女子中高等学校の運営をすることとなる。

\*参考文献等は、前掲の「7.主要な刊行物」と「8.報道」をご参照のこと。

（岩手県立大学共通教育センター）

## 韓国語教育研究（第3号）

2013年9月15日 発行

発行者 姜 奉植  
発行所 日本韓国語教育学会  
〒161-853 東京都新宿区中落合 4-31-1  
目白大学外国語学部韓国語学科  
編集者 『韓国語教育研究』編集委員会  
文慶喆、柳朱燕、金恵鎮、金鉉哲、宋貞熹  
印刷所 株式会社 仙台共同印刷